

入園児をもつ母親から



菊池慶子

わが家では、長女が卒園、入学、そして次女が入園をむかえることになり、その下に二才の長男がおります。

さきごろ、入学予定児童の健康診断が行なわれ、長女と共に小学校に行つて参りました。初めてということもありましょうが、先生方の表情や態度、全体の雰囲気などから、学校というところは——幼稚園と違って——一般社会からはかなり隔絶した独特の世界なのだという印象を受けました。幼稚園では、あたたかい雰囲気のおかげで実ののびのびと過ごしている長女ですが、入学すれば相

当に「苦勞」を味わうことになるのではないかと……と、小学校の白く長い廊下を手をつないで歩きながら思つたのです。

もっとも、幼稚園というところも、入園してしばらくは、長女にとつてかなりの試練だった様です。入園まではごく丈夫でしたのに、入園式から数日後にひどいカゼを引いて十日程も休み、その後も体調もすぐれず表情も冴えず、五月には初めて自家中毒というものを起こし、高熱が下がらないため三日間の入院まで経験してしまい

ました。お医者さんの診断では、「入ったばかりの幼稚園での緊張と疲れが大きな原因」ということでした。親からみれば、あれほど優しくあたたかく受け入れてくれる幼稚園で、それほど緊張や疲れがあるうとは想像もできなかったのですが、やはり子どもの感じ方というのは鈍磨した大人のそれとは別物なのでしょう。その後も度々調子を崩し、初めの一年間は本当に休みがちでした。それが年長組になってからは打って変わって元気になり、休むことも全くなくなりました。お友だちも増え、帰宅後も集まっては賑やかに遊びまわるようになりました。どうやら、一年かかって、心身ともにひとつ乗り越えた様です。貴重な体験でした。

親の方も、運動会、バザー、クリスマス等の行事を通して交流が生まれるようになり、そこからまた子どもたちのつながりも深まっていった様です。幼稚園という場を媒介にして人の輪が生まれ、そのひろがりの中で子どもたちも育っていくというこの有難さを感じますし、このことはまた幼稚園というものの担うべき大きな役割

だろうとも思います。

ところで、この地方でも、数年前までは、入園申し込みのために徹夜をするというような状態だったそうですが、最近事情は変わり、今ではむしろ幼稚園を“選択”できる段階に來たようです。そんな中で、私共はあえて、次女も長女と同じ幼稚園——街中にあつて手狭で環境もよくない——に入園を決めました。広々と環境に恵まれたところ、送迎バスのあるところ、保育時間の長いところ、給食のあるところ等々、母親とすれば心が動くような“目玉”を打ち出している幼稚園を選択することもできたのですが、“幼稚園とは何か”と自問自答しつつ、それら“目玉”一切に目をつむり、こういう決定に至りました。この幼稚園は、キリスト教会の付属であつてその精神に常に支えられていること、先生方が本当に真摯な態度で接して下さるということが、子どもにとって何ものにもかえ難いと思えたからです。幼いものの心のやわらかさと思うとき、やはり幼稚園には、しっかりした精神的な何か——必ずしもそれが宗教である必要は

ないと思いますが——を期待したいと思うのです。このことの大切さに較べれば、他のことは外で補いのつくことなのではないでしょうか。

次女は幼稚園にも先生方にも既になじみになっており、長女の時のような緊張はなからうとたかをくくっていたのですが、入園面接の前夜、急に頭痛腹痛を訴え眠

れない有様でした。翌日からは全くケロリとしていましたし、どうやら次女も長女と「同病」のようです。こんな子を送り出す幼稚園というところは、やはり優しくあたたかい場所であってほしいものです。

(岩手県宮古市在住)



菊池 まり

長女を地元の小さな私立幼稚園に入園させて一年半。

特別な設備もなく、狭い敷地に多人数の決して恵まれた環境とは言えない幼稚園ではあるが、そこに来年は長男を入園させることにした。幼稚園に一度も通った経験のない私は、殊更に幼稚園の必要性を感じないできたのだ

が、娘の幼稚園生活を通して、その意義を見出し出てきているところである。それらをふり返りつつ、更にこれから入園する子ども達にとっての幼稚園を考えてみることにしたい。

親子だけの核家族生活の中では、気をつけているつも